

アレグザンダ・ベインの感情論（２）

——『感情と意志』第３版——

本 間 栄 男

第１節 ベインとスペンサー

第１項 ベイン『感覚と知性』第２版（１８６４）以前

第２項 『感覚と知性』第２版（１８６４）

第３項 『感情と意志』第２版（１８６５）

第４項 『心と道德の科学』（１８６８）

第２節 ベインとダーウィン

第１項 ダーウィンのベイン

第２項 ベインによる『表出』への書評（１）前半

第３項 ベインによる『表出』への書評（２）後半

第３節 『感情と意志』第３版でのベインによる進化の扱い方

第１項 第２章「進化」本論

第２項 第２章「進化」付論

第４節 愛と怒り

第１項 第３版全般とそれ以前の版との差異

第２項 優しい感情

第３項 恐れ of 感情

第４項 怒りの感情

第５節 まとめ

キーワード：アレグザンダ・ベイン（１８１８－１９０２）、心理学史、感情、
ハーバート・スペンサー、チャールズ・ダーウィン

前論「アレグザンダ・ベインの感情論（1）」で『感情と意志』初版と第2版を扱った（本間 2013b）。本論では『感情と意志』第3版の進化論を取り入れた感情論をスペンサーおよびダーウィンとの関係で見ている（スペンサーの感情論に関しては：本間 2015）。

第1節 ベインとスペンサー

アレグザンダ・ベイン（Alexander Bain, 1818-1903）が生きた時代はハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の生きた時代とほぼ重なる¹⁾。両者ともに骨相学の影響を受け、連合主義心理学を受け継ぎ、功利主義と関係を持った。しかし、進化思想については両者の対応は全く異なる。出身地（ダービー）からして進化思想に近縁だったスペンサーと対照的に、ベインは（ダーウィンの『種の起源』以前には）ほとんど言及することがなかった。この違いは、おそらく大学教育を受け大学に勤めたベインと、アカデミックな教育を受けず市井の思想家であったスペンサーとの間にある差に由来するのだろう。『創造の自然誌の痕跡』のチェンバース（Robert Chambers, 1802-1871）も大学人ではなく出版人であり（本間 2015：第1節第1項）、なによりチャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-1882）もアカデミックな世界で生計を立てている人物ではなかった。そして、スペンサーは当時のアカデミックな世界が使用できなかった進化思想という武器を用いることでブリテンの読書界に切り込むことができたのである。

第1項 ベイン『感覚と知性』第2版（1864）以前

ベインが『感情と意志』初版（Bain 1859）を出版した時には、既にスペンサーの『心理学原理』初版（Spencer 1855）が出版されていた。ベインはこの著作にほとんど注目していなかったらしいし、ほのめかし以上の

言及もない。『感情と意志』で言及がない理由は、スペンサー心理学は主に知性論を扱い、感情についてはほんのわずかししか触れていなかったからであろう（本間 2015：第2節）。

ペインが進化思想と取り組むことになった（取り組まざるをえなくなった）のは、『感情と意志』初版に対するスペンサーの書評論文（Spencer 1860a）に対応することがきっかけであった。それでも『感情と意志』第2版（Bain 1865）本文ではほとんど進化思想は触れられず、付論においてスペンサー批判に應えるのみであった（Bain 1865: 601-611；本間 2013b: 第2節題2項）。そもそもペインはスペンサーの『心理学原理』初版を読んでいなかった。ペイン『自伝』（Bain 1904）にも言及はない。スペンサーが伝えるペイン自身の話によれば（ペイン自身は伝えていない、年代は不明）、ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）との対話中にペインはその著作を読んでいないことを認めた、という。読まなかったのはある書評（不明）のせいで、その後、ペインはその著作を読み、書評が正しくないことを認めた、という（Spencer 1904: II, 121）。しかし、スペンサー『心理学原理』第2版が出版されるとすぐにそれを注意深く読んだ。その著作に大きな重要性があることは認めながらも、「その著作の全体的枠組みが進化に基づいていたので、彼〔スペンサー〕の思考の復元と配置のやり方は私のとまるで異なっていた」（Bain 1904: 302）、と受け入れに困惑を示している。

関係する著作・論文を年表にしてみよう（表1）。

第2項 『感覚と知性』第2版（1864）

1864年の『感覚と知性』第2版（Bain 1864）本文でスペンサーへの言及が見られるが、進化思想に関するものではない（Bain 1864: 199-200, 339, 405）。第2版に付加された付論（Appendix）のいくつかはスペンサー

	ベイン	スペンサー	ダーウィン
1855	『感覚と知性』初版	『心理学原理』初版	
1859	『感情と意志』初版		『種の起源』初版
1860		「ベイン『感情と意志』について」 「笑いの生理学」	
1864	『感覚と知性』第2版		
1865	『感情と意志』第2版		
1868	『心と道徳の科学』初版 『感覚と知性』第3版		
1870		『心理学原理第2版第1巻』	
1871			『人間の由来』
1872		『心理学原理第2版第2巻』	『ヒトと動物における感情の表出』
1873	「ダーウィン『表出』評」(『感覚と知性』付録)		
1875	『感情と意志』第3版		

表1 ベイン、スペンサーおよびダーウィンの感情関係著作年表

への反応である。付論Aではベインはこの第2版で、スペンサーに倣って感情関係の用語を整理し直したことを認める (Bain 1864: 625-626, APPENDIX A)。具体的には feeling と emotion を同義に用いていた初版から、類として feeling, その下位分類として感覚 sense (これはベインの連合主義心理学では知性の要素となる) と感情 emotion を置いた (表2)。ただ, feeling には適切な形容詞形がないので emotional を代わりに用いる (Bain 1864: 625)。

付論Bではスペンサーの笑いと言きの理論が批判される (Bain 1864: 626-269, APPENDIX B)。スペンサーの「涙と笑いの一理論」(Spencer

アレグザンダ・ペインの感情論（２）

feeling	
sense	emotion

表２ ペインにおける感情関係用語の関係

1852)と「笑いの生理学」(Spencer 1860b)を引きながら、スペンサーの言う、感じの強さと身体表出(笑い)の強度が比例するという規則を示した後、ペインはこの規則が快から来る笑いには当てはまるものの、苦から来る泣きには当てはまらない、むしろ苦が多いほどその身体表出は弱くなるのだ、と主張する(Bain 1864: 626-629)。その後も、いくつかスペンサーに触発された議論があるが、どれもスペンサーの進化論に関連するものではない²⁾。

第3項 『感情と意志』第2版(1865)

1865年の『感情と意志』第2版でのスペンサーへの言及の一部は前論文で触れた(本間 2013b)。そこで触れなかったものとして、第2版で追加されたスペンサー「笑いの生理学」への批判がある。スペンサーは罪のない笑い(良いダジャレのような)を認めるが、ペインは笑いが何かしらの不名誉を担っていると考えるのである(Bain 1865: 253; 本間 2013b: 註14)。最も主要なスペンサーへの言及は付論B「感情の分類」(Bain 1865: 601-611)に見出せる。前論文でも論じた(本間 2013b: 113-114)が、ここで補足的に見ていこう。この付論のおよそ半分がスペンサーによる書評論文(Spencer 1860a)の要約とそれに対するペインの反論で構成されている。ここでペインは進化論を全てスペンサーから学んだとしている。「発達あるいは進化の理論(the theory of Development, or Evolution)」,「スペンサー氏の進化説(Mr. Spencer's doctrine of Evolution)」として言

及しながら、バインはそれを「他の仮説が説明できない事実を結びつけるための一仮説 (an hypothesis) として、私はその説を高く評価する」(Bain 1865: 602)。そして、この仮説を認めるとしても、自らの分類を変更する必要はない、とつっぱねる。スペンサーの提案した感じの4分類(本間 2015)も、以下のようにバインの分類に対応できる(表3)。

スペンサー	バイン
現前的感じ (presentative feelings)	筋肉感覚・外的感覚
現前的・表象的感じ (presentative-representative feelings)	単純感情
表象的感じ (representative feelings)	観念的感情
再表象的感じ (re-representative feelings)	* 複合感情 ³⁾

表3 スペンサーとバインの感情分類対比

このようにして、バインはスペンサーの批判を取り込んだのである。

第4項 『心と道德の科学』(1868)

バインは第2版となった『感覚と知性』『感情と意志』を縮約した著作『心と道德の科学』を1868年に出版する(Bain 1868a)。この著作は『心の科学』『道德の科学』として分離されて刊行されることもあった⁴⁾。この『心と道德の科学』でスペンサーが言及される⁵⁾。

最初は第2書「知性」の第7章「外的知覚」における、距離知覚が純粹に生後の経験によるのか、生得的かという従来の二択に対して、第三の選択肢として前の世代の距離知覚の経験の遺伝が挙げられる箇所である(Bain 1868a: 197, II.VII.15)。これは「発達仮説 (the Development hypothesis)」として言及され、「ダーウィン、スペンサー、及びその他によって」それを支持する事実が加えられているが、バイン自身はこの仮説がヒトに

当てはまるかどうかについては慎重な姿勢である（Bain 1868a: 197）。「発達仮説」とはスペンサーの用語そのままであり、獲得形質の遺伝を思わせる書きぶりからも、ペインがスペンサーを念頭に置き、それとダーウィン進化論との差異を十分に把握していないことが伺える。ちなみに、『感覚と知性』第２版の対応する箇所には進化論的な言及は全く無い（Bain 1864: 370-374）が、『感情と意志』第２版の付論Ｃ「反射と意志活動の区別」の一部に相当する（Bain 1865: 611-614）。

次に、第３書「感情」の第１３章「美的感情」の後、章番号のない「おかしさ（the ludicrous）」の第１節でスペンサーの「笑いの生理学」（Spencer 1860b）での生理学的記述を特に批判も無く利用している（Bain 1868a: 315, III.?.1）。また、第３書「意志」の第１章「意志作用の基本的要素」の第７節で、心的な感じと表出活動の関連の一例として感情表出（表情）を挙げる（Bain 1868a: 322-323, III.I.7）。この時、ペインはスペンサー「笑いの生理学」での感情表出論を法則として言及している（Bain 1868a: 323）。主に感情に関連してスペンサーに言及する際にその進化論的な含みには触れない。

そして、倫理学部分（表題に moral とあるが副題と内容では ethics となっている）で古代から同時代までの倫理学の代表例を挙げる中にスペンサーが現れ、おおまかなスペンサー倫理学の要約が行われる（Bain 1868b: 721-725）。まだ『倫理学原理』（1897）以前なので、断片的な言及をペインがつなぎ合わせたものである。それでも、スペンサーの進化倫理学、すなわち道德直観が進化の過程で獲得され遺伝することを把握し、進化を内的感じと環境との平衡状態へと向かうことだとペインは理解している⁶⁾。

著作全体の最後に付論がある⁷⁾。付論Ｂ「知識の起源」（Bain 1868a: 33*-75*）でスペンサー知識論（『心理学原理』初版の最初の部分に見られる、本間 2015a）を批判している（Bain 1868a: 72*-73*）が、本論文とは関連

しない。付論C「心の諸分類」(Bain 1868a: 88*-92*)では、知性と感情に関してそれぞれの下位分類が単に列挙されていて、最後に連合法則についての先行研究の例が挙げられているだけである。スペンサーは知性と感情の分類で挙げられているが、それは1860年の書評論文で挙げられた分類に他ならない (Bain 1868a: 89*, 90*; Spencer 1860a; 本間 2015a: 第3節第2項)。

逆に、スペンサーはその著作の中にバインをどのように取り込んでいたか。1860年の書評論文の後、1870-1872年の『心理学原理』第2版全2巻では、書評論文での評価の通り、バインの著作を個別事例の資料として参照させているだけである (Spencer 1870: 127; Spencer 1872: 625)⁸⁾。

第2節 バインとダーウィン

1859年初頭に出版された『感情と意志』初版は、同年末に出版されたダーウィン『種の起源』初版 (Darwin 1859) に先行していた。そのためか、バインはダーウィンを代表的な博物学者として註で言及するのみだった (その註も第2版以降では削除される, 本間 2013b: 106)⁹⁾。1865年の『感情と意志』第2版にも本文中にはダーウィンの名は見えず、付論Cに見出せる。1868年の『心と道徳の科学』についても本論文第1節第4項と同様である。

第1項 ダーウィンのバイン

一方、ダーウィンはバインの著作を積極的に利用している。1871年の『人間の進化と性淘汰』では、バインの『心と道徳の科学』(Bain 1868a) のみがしばしば言及されている (Darwin 1871: I. 70, 75, 78, 82, 95¹⁰⁾, II. 420)。ただし、スペンサー同様、ダーウィンもバインの著作をある種資料集として利用している。

1872年の『ヒトと動物における感情の表出』（Darwin 1872）では、さらにペインの他の著作も言及される。まず、先行研究の1つとしてペインの『感覚と知性』『感情と意志』の第2版が言及されている（Darwin 1872: 8-9）。そこでは、ペインの拡散法則が個別の表情を説明するには「一般的すぎる」と批判されている（Darwin 1872: 9）。その次にはスペンサーの『心理学原理』と「笑いの生理学」に言及している（Darwin 1872: 9-10）。ペインに戻ると、連合主義の説明として『感覚と知性』（Darwin 1872: 31）、『感情と意志』の滑稽なものの例を挙げている箇所（Darwin 1872: 200）、憎しみと怒りの対象となる人物の重要度が上がると畏怖になるという効果について（Darwin 1872: 239）、恐れで口が乾くことの実例（Darwin 1872: 290-291）、男女の間の恥じらいについて（Darwin 1872: 328）、緊張とアガリについての説明（Darwin 1872: 332）、といったようにやはり豊富な事例の宝庫としてペインの著作を利用している。

第2項 ペインによる『表出』への書評（1）前半

1873年にペインは、『ヒトと動物における感情の表出』への書評を『感覚と知性』第3版（Bain 1868b）の最後に追記（postscript）として追加する。『感覚と知性』第3版は1868年出版なので、初刷にはなかったのだが、私が確認できた限りでは1874年にアメリカで出版された版に追記が始めてみられる（Bain 1874: 697-714）。ちなみに、目次には追記の記述がない。書評の日付が1873年5月であり、1873年11月にこの書評が言及されることから、この間に出た刷に付加されたのだろう¹¹⁾。1894年の『感覚と知性』第4版ではしっかり目次に明記されている（Bain 1902: 657-672）。両版では若干の変更（第4版ではダーウィンとスペンサーへの敬称が取り除かれた）を除いて大きな違いはない。なぜこの書評が『感覚と知性』に追記されるのかというと、ペイン自身が表情論を知性論の中の本能論の一部と

して扱っていたからである（本間 2013b）。

そこでのベインの議論は、まずダーウィン自身の三原理を再提示するところから始まる：第一は「有用なる連合性習慣の原理」、第二は「反対（antithetis）の原理」、第三は「最初より意志から独立な、かつある程度習慣から独立な神経の構造に因る活動の原理」（Bain 1874: 697; Darwin 1872: Chap. 1）¹²⁾。ベインは、これらの原理の順番がベインの考えと異なり、ベインの考える順番がどうしてそのようなものになるのかを解説していくことになる。

ベインが考えるのは、この3つの原理の中で、（我々に近いという意味で）最も基本的な原理が第三原理であって、他の2つはここから導き出されなければならない、ということである。この第三原理をベインは自身の「拡散の法則」とほぼ同一視している。この原理にダーウィンの他の原理（進化あるいは遺伝の法則）を加えると第二原理や第一原理ができることになる。なので、ダーウィンが3つ原理を挙げているからと言っても、重要なのは第三原理だ、ということでベインは第三原理への批判に集中することになる（Bain 1874: 697-699）。

まずベインは、『感覚と知性』など書いたように心について、拡散の法則、運動の自発性、快苦が生命性の増加減少だという快苦の法則、という3つの原理があるとする自説を思い出させ、これらをダーウィン氏が明白に述べていない、と言う（Bain 1874: 699）¹³⁾。ここでベインが「原理」と言っているわけではないし、ダーウィンのように順番を付けているわけでもないのだが、本論文では順番に第一原理「拡散の法則」、第二原理「運動の自発性の法則」、第三原理「快苦の法則」と呼んでおこう。また、ベインの挙げる第三原理「快苦の法則」はダーウィンの実例の中にはそれで説明できるものが多いにもかかわらず、ダーウィンの第二原理「反対の原理」とほとんど一致しない、とベインは言う（Bain 1874: 699）。ダーウィ

ンの第三原理に関して、ペインは自らの感情表出の仕組みの説明として、ダーウィンが明確に言及しなかった（しかし暗黙の内に使用していた）自発性（spontaneity）をまず強調する（Bain 1874: 699-701）。ここで言う自発性とは、感情の発露が外的刺激からの反応によってのみだけで起こるのではなく、内的な原因で生じることである。このことの違いは、ダーウィンの例は主に動物に関するもので、人間のような心があるとは必ずしも断言できなかった（この後の行動主義者も同じ呪縛に囚われ続ける）のに対して、ペインは人間のみを論じているからであろう。

次では戻ってペインの第一原理「拡散の法則」に対するダーウィンの言明に対して。この法則は『感情と意志』で出てくるものだ。ダーウィンはその説明を当然要約して述べるが、そこに自発性を入れていないことにペインは文句を付ける。その際にスペンサーの『心理学原理』第2版についてさりげなく触れることも忘れない（Bain 1874: 701）。

そして最後がペインの第三原理「快苦の法則」について。ペインはダーウィンが主に『表出』第5章から動物の興奮と抑圧の状態についての対比を頁数を添えて抜き出し、そこから一般的原理（ダーウィンの「反対の原理」）を帰納的に導出する（この時代はこれが科学的方法だった）ダーウィンの試みを評価する（Bain 1874: 701-703）。反対の原理とは、たとえば、イヌが情愛（affection）に対する表出方法が無いので（情愛がない、と言っているわけではない）、その表出は敵意に駆られた攻撃の場合の反対の表出の形態を取る、という場合のように、心的感情（この場合は情愛）の通常の表出方法が無ければ、その反対（この場合は敵意）の通常の表出方法の反対のやり方を利用する、というものである（Darwin 1872: 28-29; Bain 1874: 698-699, 703）。それに対してネコは、情愛と敵意の2通りの表出を持つので、両方が異なる態度として表れる。これを深く理解するために、ペインは以下のように発言する。

反対の原理に選ばれる感情は心的に対立（明らかに発達段階では異なる根を持っている）していて、その表出も反対となる。たとえば、攻撃と逃避（心的には怒りと恐れ）は行動的にも心的にも反対物とみなされることは明白だろう。次に、情愛に身体表出を欠くとするダーウィンを批判する。情愛も怒り同様に心的なものと身体的なものを共に持ち、どちらかを欠くことはできない（Bain 1874: 703-705）。

前々段落と前段落の考察は、ダーウィンの第二原理と第三原理がベイン自身の快苦の法則（この場合、快と身体的高揚、苦と身体的抑圧を結び付けること）に相当するものを仮定していたのだ、ということを明らかにしようとするベインの試みであった。すなわち、ダーウィンの原理より基本的な原理として自らの原理の優位を示そうとしたのである。以下は快苦の具体例を挙げて自らの法則が成立していることを示して、この長い書評の前半が終わる（Bain 1874: 705-708）。

第3項 ベインによる『表出』への書評（2）後半

書評後半の前半はダーウィンの第一原理「有用なる連合性習慣の原理」にあてられる。ベインはこの原理を「ダーウィンの理論家としての栄冠」とまで賞賛する（Bain 1874: 708）。これは感情表出の起源として獲得形質の遺伝を含む点で重要である。感情表出が今このようであるのは、かつてそうであったことが生き残り上有利だったからだ、というのは今日でも進化心理学で行われる説明方法だ。このやり方で怒りと嘲笑の表出がかつての攻撃的態度の名残だとダーウィンは言う。さらに、苦の表出（しかめ面と口角を押し下げること）の説明でダーウィンは他を圧倒した、とベインは言う。なにしろ自らの快苦の法則でも美味しく説明できなかったからだ。今日ではよく知られた、うつ病患者特有の眉間にアーチ状の皺が寄るΩサインに関して（Shorter 2009）、ダーウィンは2つの説明を用意した。1

つはスペンサーも唱えているもので、まぶしさを避けるため眉を寄せることが基本で、これは危険な状況（苦の状況）で目を有利に使う目的があった。もう1つの説明は、苦の状態で叫ぶことが有利であったという理由だ。叫べば仲間が助けに来るだろう。なので、ヒトは苦の状態で叫び出す準備をしている、と考えられた。叫び出す準備として、眼圧が上がり目が充血し落涙する、目を押しとどめるために眉に力が入る、叫ぶために口角が下がる、と（Darwin 1872: 188-195; Bain 1874: 708-711）。

ペインはダーウィンが暗黙の内に置く2つ仮定を指摘する。第一は、叫ぶのは苦の時だけではなく、むしろ喜びの時が多いので、苦で叫ぶとしたらかなり意図的で、これがいつしか意図しないものになる、という仮定。第二は、叫ぶ時に目と顔に充血があるという仮定。特に後者の仮定は生理学の進展で否定されるかもしれないが、ともかく大胆かつ独創的で事実に適したものだ、とペインは（いくらか割り引きながらも）賞賛している（Bain 1874: 711-712）。

書評後半の後半は赤面論である。ダーウィンの赤面論の本質は自己意識による弱化効果という原理だ、とペインはまとめる。これは、自己について注意を向けると、それまでなんなくできていたことが突然ぎこちなくなることである。たとえば、医者が脈を測ると正常なのに、自分で脈を測ると不規則になる患者の場合のように。赤面の際には、心的な混乱（当惑）があり、それが血管を収縮する運動を弱化させる、すなわち血管の局所的拡張をもたらす。他者に見つめられると顔に意識が集中して不安を惹起し、顔の血管の収縮が弱化して充血をもたらし、それが赤面として現れる、というメカニズムである（Bain 1874: 712-714）。以上で書評は終わる。

ペインは、全体的にダーウィンの業績を評価しつつ、そこにより原理的な（とペインの思う）功利主義＝連合主義的な快苦法則を加えることを提案している。より基本的な法則の定立を目的とするペインには当然の提案

である。しかし、形而上学的原理への突然の跳躍を望まないダーウィンはその提案を受け流すだろう。

この書評はおそらく抜き刷りのような形で直接ダーウィンの元に届けられた。ダーウィンはバイン宛の礼状を書いている (Darwin 2014: 444)。その中で、バインが指摘したダーウィンの第三原理についての曖昧さと、バインの推す自発性について理解できていなかったことを認めた。

スペンサーの進化感情論とダーウィンの進化表情・感情論を受けて、バインはようやく重い腰を上げる。「この巻『感覚と知性』第3版」で私は、複雑感じや複雑知力を説明するために進化の原理を使わなかった。しかし、両方に応用するためにその原理に利する多くのことが言われるべきである、と私は思う。『感情と意志』第3版(目下準備中)では、充分長くそれを論じるつもりである」(Bain 1874: 698)¹⁴⁾。それが、『感情と意志』第3版での進化の章となる。

第3節 『感情と意志』第3版でのバインによる進化の扱い方

1875年に出版された『感情と意志』第3版序文で、バインは「感情への進化仮説の影響を十分に論じた」(Bain 1875: viii)。特に愛と怒りに関しては十分な考察ができた、としている。まず、第3版に新たに加えられた「第2章 進化, 心に応用されたものとして (Evolution, as applied to mind)」(Bain 1875: 47-68)を中心に考察する。

第1項 第2章「進化」本論

第2章は一般論にあたる部分 (Bain 1875: 47-58) と、2つの付論「感情の遺伝」(Bain 1875: 58-63)「社会関係の遺伝」(Bain 1875: 63-68) からなり、全てで節番号は共通している。

まず進化論が科学的説明の条件を満たす、というバインの判断が置かれ

る。進化論（the doctrine of Evolution）は、ヒトを含む動物の本能が祖先の獲得物であり、それが（本能行動に関わる神経配置まで含めて）世代間で受け渡され固定していったものだ、と説明する。個体レベルでの教育と習得（後には学習と呼ばれるだろう）と遺伝的本能の両方を１つの法則で説明できるという点で、進化論は「科学的説明」を与えることができている（Bain 1875: 47）。ここでペインの言う「科学的説明」は、19世紀後半ブリテン島の科学論を念頭に置いている（内井 1995）。すなわち、より広い説明能力を持つものがより良い科学理論だ、という考え方である。また、ここでのペインの理解は、ダーウィン進化論ではなく、スペンサー進化論であることも解る。

ともあれ、進化論は本能のような下等機能だけでなく、感情や知性と言った高等機能にも当てはまる、すなわち心の進化がある。それを証明するためには、獲得物（個体が学習によって得るもの）と本能が類似していなければならないし、獲得された心的特性が実際に遺伝するかどうかを知らねばならない（Bain 1875: 47）。前半は容易に説明できる（Bain 1875: 47-48）が、後半は難しい。進化論の仮定により進化過程がきわめて遅いため、確認が難しいからである。ここでペインはスペンサーの遺伝論から偉大な音楽家の才能の遺伝という例を引くが、そうしておいてこの例が妥当ではない、すなわち音楽の才能が遺伝しないことの方が圧倒的に多い、と批判する（Bain 1875: 48-49）¹⁵⁾。また、才能は偶然による身体的優位性にも左右される（Bain 1875: 49-51）。文明の歴史もまた、突然の変化が起こり（ギリシャ人やローマ人は突然数世紀で文明をすすめ、ゲルマン人やケルト人は文明に接するとすぐにそれを獲得した等）、どの文明にも現れる天才はしばしば遺伝しない（Bain 1875: 51）。家畜の場合にはダーウィンやスペンサーなどが豊富な例を挙げているが、心的特性に関してはそれが教育なのか遺伝なのかの判別が困難である（Bain 1875: 51-53）。

これらの難点から、心的機能に関して獲得物が遺伝するというのは可能だが例外的で希だ、とベインは結論する (Bain 1875: 53)。そして、その例外的なことが起こる場合の条件を (1) 比較的単純なこと, (2) 絶え間なく反復されること, (3) 強く興味深いこと, に限定する (Bain 1875: 53-54)。空間知覚などがこれに含まれるだろう (Bain 1875: 54-55; Bain 1868b: 197; 本論第1節第4項)。この中に含まれないのが、道徳感覚である。道徳について我々は、反復的に毎日学ぶことはない (上の条件 (2) に反する)。道徳は常に単純ではない (上の条件 (1) に反する)。そして、道徳は乗り気のしないものであり (基本的に禁止条項だから、上の条件 (3) に反する), 1人の子供の成長過程で根付かせることが難しいのに遺伝できるとは思えない (Bain 1875: 54-56)。さらに、そもそも道徳本能のようなもの自体に疑念がある。ベインは常々、道徳本能が無いと主張してきていた (本間 2013b)。我々に遺伝するものがあるとすれば、道徳感覚を成長させるのに必要な力である。力のうち第一は、苦を避け快を求める活動を引き起こすもの。第二は共感力あるいは無私の衝動 (自分の危険を顧みずに子供を助けること等)。第三は恐れ、愛、怒りといった感情自体を持つこと。これらの生得的準備を得て、権威の下での教育が道徳感を作るのである。つまりベインはスペンサーの道徳感情進化論を否定するのだが、道徳性そのものが人類の文化進化の過程で経験の蓄積と教育で (すなわち生物学的蓄積によるのではなく) 発展してきたとするならば、結果としてスペンサーと一致するのだ、と断言することになる (Bain 1875: 56-58)。結局ベインは進化思想の流入と影響を最小限に押しとどめたと言えよう。スペンサー道徳感情進化論に別の進化論的見解を併置させることで、ベインは後の〈氏と育ち〉論争への解決案すら見出していたように思える。

第２項 第２章「進化」付論

次は付論１の「感情の遺伝」である。感情は感じの連合であり、個人の生活史の中で様々な快苦と快苦から中立なものの多くと連合を成している。進化論者（the believers in evolution）は感情に対して、それを引き起こす様な恒久的で一様な環境を想定する。その環境は無生物的な光景と生物の環境を含むだろう。確かに普遍的で不変的な環境要因（空・大地・草木）は我々身体の神経組織に刻印され、遺伝するかもしれない（Bain 1875: 58-59）。しかし、最大の遺伝的要因は仲間や獲物との間に起こる感受性を持つことである。ヒトの赤ちゃんが表情で共感的なコミュニケーションを行うことはダーウィンによって観察されていた。これは生まれつき何らかの空間的關係（顔のパーツの相互位置関係）の把握能力がある、すなわち遺伝的伝達があることを示すだろう（Bain 1875: 59-60）。それに対して、明らかに遺伝によって変化を被らない感じがある。身体器官的な感覚（空腹・満腹、性的満足等）は、親の世代での変化が子に伝わるという意味での遺伝的ではない、すなわち変化がない。スペンサーは親であることの本能を遺伝的变化の積み重ねで論じようとしているが、ペインはこれも世代で変化するものではないと考える（Bain 1875: 60-61）。身体に基本的な感じは〈獲得形質の遺伝〉を被らないが、変化を被るような感じがあるとしたら、それは観念的性質を持つだろう（Bain 1875: 61-63）。この付論でペインは、親のものがそのまま伝わる遺伝と世代を経て変化するという意味での遺伝を微妙に分けようとしている。用語として、〈伝わる〉一般に関しては transmit、〈変化の蓄積を伝えるという意味で遺伝的な〉に関しては inheritance, hereditary、というように使い分けているようだが、あまり明晰ではない。

最後が付論２の「社会関係の遺伝」である。ここでペインはスペンサーの感情進化による社会進化論について言及しているが、一貫した主張はな

く散発的に紹介しているスペンサーの文言に疑念を表しているだけで、紹介するほどの内容はない (Bain 1875: 63-68)。これ以前の部分でスペンサーの社会進化論の大枠への反論は果たしているからだろうか。ともかく、ベインはスペンサーの見解（その多くは『心理学原理』第2版第2巻のもの；本間 2015: 第4節）をある程度吟味して、その結果、自らの社会感情論を一切変える必要を見出さなかった。そのため、ベイン感情論の最後の章（倫理的感情あるいは道徳感覚論）は初版からはほとんど変化しないままになるのである。

第4節 愛と怒り

『感情と意志』第3版序文で述べたように、ベインは愛と怒りに関して、特別に進化論を配慮した議論をしている。本節ではそれについて見ていくことにしよう。

第1項 第3版全般とそれ以前の版との差異

第2章に「進化」が入った結果、第3章に繰り下げられた「感情とその分類」(Bain 1875: 69-77)は第2版の文章をほとんど残していない¹⁶⁾。法則や説明方法に関して自覚的な議論が入ってきたことと、説明自体が見通し良くなったことで、以前より改良されている。とはいえ、第2版までと内容的に大きな変更はない。感覚の複合体が単純感情であり、今度は単純感情が複合してより複雑な感情になる。では、全ての感情が感覚だけから生じるのか、あるいは別の源泉から生じるのか？ この問いに、ベインは回りくどい語法で、愛と怒りと恐れは感覚とは独立の源泉を持つとする。しかし、それが具体的に何かについてはここでは触れない (Bain 1875: 72-73)。後に、その源泉が進化的に獲得されたものだ、ということになる。つまり、感情源泉は、感覚・愛・怒りの3つ（ここでは恐れは入らない）

となる（Bain 1875: 73-74）。感情品目分類は単純なものとして愛・怒り・恐れ、派生的複合的なものとして所有・力・プライド・虚栄・計画関心・知識・美・道徳感が列挙されることになる。この中で最も必要不可欠な要因が愛と怒りの２つである。ただ、議論の順番としては、相対的感情（驚きなど）・観念的感情・共感が先に論じられ、その後に品目が１つずつ取り上げられることになる（Bain 1875: 74-76）。

この順番に従って、第２版で付加された「調和の感情」に関する章が削除され、初版第４章「驚きの感情」を拡充した第２版第４章「相対性の感情」をさらに改編した第３版第４章「相対性の感情」が続く（Bain 1875: 78-88；本間 2013a: 第８節）。相対性の法則とは、先行する何かとの比較によって現前するものが判断される、ということを指す。この法則の含意を説明する部分が第３版で新規に加わった大部分である。各論に関しては大筋第２版と変わらない。

第２版第13章「観念的感情」が第３版第５章「観念的感情」として持ち上がる（Bain 1875: 89-110）。構成も変化し、文章は全く書き直されている。その本質は、観念的感情が（その感情の対象が現前しなくても）記憶の中から取り出して再現できる感情（回復可能（revivable）と言われる）だ、ということに尽きる。その回復する条件・契機について様々な考察が行われる。

その次には第２版第12章「共感と模倣」の章が持ち上がって第３版第６章「共感」となる（Bain 1875: 111-123）。これも第２版とは全くの別物になっている。「共感（SYMPATHY）は他の存在の感じに入り込むことであり、その他者のために感じを自分自身のものであるかのように表出することである」（Bain 1875: 111）。ペインは、共感を利己主義の表れであると考えすることに反対する。究極的には自己利益になるということでは説明できない無私・利他性が存在することが、この「共感」の存在理由になる。

共感のメカニズムとしては、他者の状況から自己の過去の感じ状態を想起し、それを他者に付与することである (Bain 1875: 112)。そもそもその起源は何であろうか。ベインはそれを疑似進化論的な思考で探求する。人間は常に群れで生きてきた。その歴史の中で群れの仲間と感情（具体的には快苦の経験）を共有するという経験が蓄積されてきた。それが共感となった、という仮説である (Bain 1875: 121-122)。共感があった方が生存に有利だった、というより進化論的な仮説ではない。群体の世代交代を個人の成長と平行に見ているようである。

第2項 優しい感情

次は第2版第5章「恐れ感情」を飛ばして、第6章「優しい感情」を先に出して第3版第7章とする (Bain 1875: 124-150)。第3版の文章は第2版から全く書き換えられている。ここに愛の話題が含まれる。

第3版のこの章の、第2版までにはなかった「予備的考察」(Bain 1875: 124-127)に、進化論を意識した前置きがある。前章でベインは群れる生活が社会性と愛の起源であり、そこから共感が生じるとしていた（本論文第4節第1項）。スペンサーはやはり共感の起源を群れる生活に求めるが、愛情などの優しい感情の存在を考慮していないことに議論の穴がある、とベインは指摘する (Bain 1875: 124)。またスペンサーは究極の善意である無力者への愛に社会性以外の起源を求めているが、ベインはそれを優しい感情に求める (Bain 1875: 124-126)。この優しい感情の起源は接触の感覚あるいは抱擁の快 (the pleasure of the *embrace*) にある（強調は原文）：「要するに、我々の愛の喜びは官能的接触に始まり終わる。接触は愛情のアルファでありオメガである。究極的で満足を与える感覚として、それ以上ないものとして、それは最高度の快であるに違いない」(Bain 1875: 127)。ここでベインはしばしば自らの優しい感情の扱いでスペンサーとの差異化

を強調している¹⁷⁾。

優しい感情の目的は快であり、動因としては時に苦もある（苦を感じている時に社交を求め、他者の愛と共感を求めるから、Bain 1875: 127-128）。以前見たように（本間 2013b: 第３節第５項）、ペインの言う優しい感情には悲しみも入る。そのため、落涙の問題がここで話題になる。落涙に関するダーウィンの観察とスペンサーのメカニズムに言及し、優しい感情との関連では他者への憐憫が落涙の原因として挙げられる（Bain 1875: 128-129）。スペンサーやダーウィンが個体の生理現象としての落涙に注目する一方、ペインはその社会的機能にも目を向けようとしている。

優しい感情の下位分類に関しても大きな変更がある。基本的に、社会性（社交性, sociability）を疑似進化論的な説明の基礎としている。群れで住む生物（ヒトを含めて）は、同じ群れの仲間に同胞愛（Fraternity）を持つ。仲間として利益（快）を与えてくれる存在に感じる感じに基づいている（Bain 1875: 131-132）。群れで生きる場合、与えられる快（同胞愛）だけで充分だが、与えることによる快がその状況から徐々に発生する。後者が愛の抱擁と結びつくと群れの状態は最も良くなる（Bain 1875: 132-133）。そして、抱擁は個別な好みを生み出す（Bain 1875: 133-134）。

以下、優しい感情の下位分類項目が続く。それらの分類自体は第２版までとほぼ同じ（最初の部分のみ異なる）だが、内容はかなり書き換えられている。

第１項目は「性（sex）」で、これは第２版にはない。性愛（the sexual love）は性的欲求に起源を持ち、それに様々な付加要素を加えた感情である。これがあることによって、群れの同胞を単なる同胞としてだけでなく付加的に異性として関心を寄せることを可能にする（Bain 1875: 135-138）。

第２項目は「親心（parental feeling）」。これは第２版までの「家族群（family group）」に含まれていたものの拡充である。群れの状態では危機

に際してその最も無力な構成員に関心が集まる。群れの弱者も群れの中の強者への好みを持つ（庇護してもらえから、Bain 1875: 138-139）。不思議なことにベインは親子の愛を無条件に前提として議論を組み立てることをしない。この親心を誘発する要因としてスペンサーは新生児などの無力さを挙げたが、これをベインは否定する。無力さは反省の内観を伴うかなり高度な判断だが、親心はもっと単純だろう。その起源は幼児の抱擁、すなわち親子の身体的接触の快から発する。この快を通じて子は親の容姿への愛好を持ち、親は子を養育する必要性を見出す。幼児の与える小ささ、微笑みが養育者の愛撫や配慮を引き出すことになる（Bain 1875: 139-142）。

第3項目は「善意の愛情（the benevolent affections）」。これも第2版にある項目だが大幅に書き換えられている。善意の最初の形態は憐憫（pity）あるいは同情（compassion）・共感を元として苦しむ他者を助ける快から生まれた。スペンサーは母性衝動の変形と見たが、ベインは異なる起源を与えている（Bain 1875: 142-144）。

第4項目は「感謝（gratitude）」。これは第2版まで「善意の愛情」の項目下に含まれていたものが独立し、半分ほど全く新しく書き加えられた。優しい感情は行き着くところ抱擁になる。感謝は受けた快への返答として返す快である。この感謝はまた自身による優しくして善意ある行為の源泉となり、正義（justice）ともなる（Bain 1875: 144-145）。

第5項目は「悲しみ（sorrow）」で、これは第2版の同じ項目を一部削除しただけで変わらない。

最後の第6項目は「賞賛と尊敬（admiration and esteem）」で、これも第2版の同じ項目とほとんど変化がない。

第3版第7章での優しい感情は、ベインなりに原始的状況からの感情の発生を考慮した説明を成し遂げようとしていた。群れ状態から仮想的に様々な感情を発生させるやり方は、スペンサーの説明方法と似ているが、スベ

ンサーほど獲得形質の遺伝に依拠せず、なんでもかんでも進化で説明しようとしていない。このペインのやり方は、唯生物学的進化主義ではなく、生物進化と社会進化を取り混ぜた柔軟な進化主義という評価ができるのではないか。

第３項 恐れ of 感情

『感情と意志』第３版第８章「恐れ of 感情」は、第２版第５章に相当するが、一部を除いてほぼ書き換えられた新しい章になっている。その変更も、中心には進化論の導入がある、若干否定的ではあるが。「予備的考察」で、恐怖を説明するために進化仮説は必要ないとされる。心的活動の一般法則が進化で得られたとしても、個別の感情までもが特に進化論的説明を必要とはしない。ここでペインはスペンサーを意識して反論している。ペインの考えは、動物が特定の天敵を恐れるといったような恐怖自体が遺伝するのではなく、何かを恐れて逃げるといった傾向が遺伝するのであって、どの対象を恐れるようになるのかは産まれてからの学習によるのだ、というものである。そうでなければ、幽霊や来世での罰を恐れる感情がどのように説明できるというのか、とペインは言う（Bain 1875: 151-156）。

第４項 怒りの感情

『感情と意志』第３版第９章「怒りの感情（emotion of anger）」は、第２版までの第９章「怒り感情（the irascible emotion）」に相当するが、やはりここでも進化論を取り入れて大幅な書き換えが行われた。ペインは先ず、スペンサーに従って、怒り感情が捕食者としての生活から派生したという仮説を述べる。この仮説は最終段階で説明が上手いかない、とペインは言う。もしその仮説通りなら、獲物を得ることでライヴァルとの争いからも解放されたという喜びが加わるはずだ。つまり、捕食者の生活から

は満足が派生しても怒りにはならない。むしろ怒りは、「我々に苦を与えたものに苦を加えることの喜びである；敵の不幸と苦しみをほくそ笑むことである」（Bain 1875: 172）¹⁸⁾。これはかなり高度な感情であり、下等動物にはない（Bain 1875: 172-173）。怒りの表出に関しては主にダーウィンの例を引き、進化的な連続性は認めている（Bain 1875: 173-176）。ベインは、怒りの感情に関して単純に下等動物（ヒト以外の動物）から直線的に進化してきたとは考えない。人間に至って高度なひねりが加わったと考えるのである。これは、第2版まででは怒り感情が複合感情に含まれていたこととも関連する。ベインは怒りを高度な感情と捉えていて、そこに義憤や時として道徳を守る役割まで見出していた（本間 2013b：第3節第8項）。この見解は第3版においても変わらない。怒りの下位品目（怒りの種類）では、いくらか文章は付加されているもののほぼ第2版の文章を残している。ベインが第3版で付加したのは主に下等動物との非連続性の強調とその表出に関しての連続性の確認のみであった。

第5節 ま と め

ベインは『感情と意志』第3版で進化思想を受け入れたが、スペンサーのように進化を全ての説明原理とすることなく、最小限に受け入れた。その理由は、ベイン思想の根本にある経験主義的傾向にある。特に道徳に関しては、生得的なものは基盤であり、その他は歴史・文化的蓄積と個体発達史に由来すると考えた。スペンサーと同様にベインも、人間の心が、系統発生（生物進化）、歴史・文化および個体発生という3つの起源から成り立っていると考えたが、その比率が両者で異なっているのである。

注

- 1) ペインの略伝については：本間 2013a: 第1節。スペンサーの略伝については：本間 2015: 註1。
- 2) 『感覚と知性』第2版でペインが「evolution, evolve」と言う時、それは「進化」の意味ではなく、発生学的な意味での展開・発達を意味している。この事情は次の『心と道徳の科学』でも同様である。
- 3) 「複合感情」という用語をペインは用いていない。本間が前論文で仮に与えた呼称である（本間 2013b）。
- 4) これは明治初期にさらに抄訳されて日本語で出版されることになる（本間 2013a: 註10）。
- 5) 『心と道徳の科学』は、書（BOOK）、章（CHAP.）、節（番号のみ）から成り、各節は節番号に続く命題と、それを解説する活字が少し小さい文章でできている。言及箇所を位置を把握しやすいように（頁数、書・章・節）とする（巻と章はローマ数字）。
- 6) ペインが参考に行っているのは、ミル宛のスペンサーの書簡（年月日は不明）と『第一原理』第2版である。ミル宛の書簡のより十分な引用はスペンサーの『自伝』にある（Spencer 1904: II, 88-89）スペンサーの進化倫理学については：本間 2015。
- 7) これは本文の後に、独立したページ番号付けがされている。本論文では、引用の際には本文と混同がないようにページ番号の後にアスタリスク（*）を付ける。
- 8) 『心理学原理』第3版でも、該当箇所は変更が無い。ただ、途中で増補されているために、2番目の箇所の頁数が異なる（Spencer 1899: II, 691）。
- 9) それ以前の1855年の『感覚と知性』初版では、ミュラーの引用文中にダーウィンの名が見えるが、おそらく祖父エラズマスのことと思われる（Bain 1855: 335）。
- 10) この部分はミル宛のスペンサーの手紙を言及している箇所なので、ペインの意見を引いているのではない。
- 11) ダーウィン『表出』のダーウィン生誕200周年記念版に序文と註を付けたアメリカの表情研究者ポール・エクマン（Paul Ekman, 1934-）は、ペインの1873年版にある、としている（Ekman 2009: 80）。*Nature* の1873年11月6

日号にベインの書評への匿名の反論が掲載された (Ekman 2009: 81)。

- 12) 用語は浜中浜太郎に従った。
- 13) ベインは「法則 (Law)」と「原理 (Principle)」を区別していないので、「拡散の法則という原理」のような言い方もできる。ここでの法則も原理もニュートン力学を模しているが数学的な関係性が与えられているものではない点で、スペンサーと同様である。
- 14) この引用を含む段落は、当然のことながら『感覚と知性』第4版では削除された。
- 15) Spencer, *The principles of biology*. Vol. I, Part II, chap. VIII. “Heredity”.
- 16) 『感情と意志』各版の構成については；本間 2013a。
- 17) ベインは結婚して子供がいたが、スペンサーは生涯独身でひょっとしたら恋愛関係すらなかったかもしれない (本論文註1)。
- 18) この後半はドイツ語で言う Schadenfreude にあたる。第3版ではこの部分が歴史事例を加えて拡張されている (Bain 1875: 178-179)。

参 考 文 献

一次文献 (同一著者内では年代順)

- Bain, Alexander 1855, *The senses and the intellect*. London: John W. Parker and Son
- Bain, Alexander 1859, *The emotions and the will*. London: John W. Parker and Son
- Bain, Alexander 1864, *The senses and the intellect*. 2nd ed. London: Longman, Green, Longman, Roberts, and Green
- Bain, Alexander 1865, *The emotions and the will*. 2nd ed. London: Longmans Green, and Co.
- Bain, Alexander 1868a, *Mental and moral science: A compendium of psychology and ethics*. London: Longmans, Green, and Co.
- Bain, Alexander 1868b, *The senses and the intellect*. 3rd ed. London: Longmans, Green, and Co.
- Bain, Alexander 1874, *The senses and the intellect*. 3rd ed. New York: D. Appleton & Company
- Bain, Alexander 1875, *The emotions and the will*. 3rd ed. London: Longmans Green,

- and Co.
- Bain, Alexander 1891, “On physiological expression in psychology”, *Mind* (old series), **16**(1): 1-22 (reprinted in *Dissertations on leading philosophical topics* (London: Longmans, Green, and Co., 1903), 162-188)
- Bain, Alexander 1899, *The emotions and the will*. 4th ed. London: Longmans Green, and Co.
- Bain, Alexander 1902, *The senses and the intellect*. 4th ed. New York: D. Appleton and Company
- Bain, Alexander 1904, *Autobiography*. London: John W. Parker and Son
- Darwin, Charles 1859, *On the origin of species by means of natural selection*. London: John Murray (渡辺政隆 訳『種の起源』全2巻 東京: 光文社, 2009)
- Darwin, Charles 1871, *The descent of man and selection in relation to sex*. 2vols. London: John Murray (長谷川真理子 訳『人間の進化と性淘汰』全2巻 東京: 文一総合出版, 1999-2000)
- Darwin, Charles 1872, *The expression of the emotions in man and animals*. London: John Murray (浜中浜太郎 訳『人及び動物の表情について』 東京: 岩波書店, 1931)
- Darwin, Charles 2014, *The correspondence of Charles Darwin*. Volume 21 1873. Cambridge: Cambridge University Press
- Spencer, Herbert 1852, “A theory of tears and laughter”, in *Essays: Scientific, political, and speculative* (London: Longman, Brown, Green, Longmans and Roberts, 1858), pp. 400-405 (初出は *Leader*, 1852年10月11日)
- Spencer, Herbert 1855, *The principles of psychology*. London: Longman, Brown, Green, and Longmans
- Spencer, Herbert 1860a, “Bain on the emotions and the will”, in *Essays: Scientific, political, & speculative*. Vol. 1 (London: Williams & Norgate, 1891), pp. 241-246 (First published in *The Medico-Chirurgical Review* for January, 1860)
- Spencer, Herbert 1860b, “The physiology of laughter”, in *Essays: Scientific, political, and speculative*. Vol. I (London: Williams and Norgate, 1868), pp. 195-209 (初出は *Macmillan's Magazine*, 1860年3月)
- Spencer, Herbert 1870, *The principles of psychology*. 2nd ed. vol. I. London: Williams

and Norgate

Spencer, Herbert 1872, *The principles of psychology*. 2nd ed. vol. II. London: Williams and Norgate

Spencer, Herbert 1904, *Autobiography*. 2vols. London: Williams and Norgate, 1904

二次文献

Ekman, Paul 2009, *Charles Darwin, The expression of the emotions in man and animals: Introduction, afterword and commentaries by Paul Ekman. 200th anniversary edition*. Oxford: The Oxford University Press

本間栄男 2013a, 「アレグザンダ・ベインの感情論の構成」, 『桃山学院大学 国際文化論集』, n.47: 93-137

本間栄男 2013b, 「アレグザンダ・ベインの感情論(1)『感情と意志』初版と第2版」, 『桃山学院大学 人間科学』, n.44: 97-145

本間栄男 2015, 「ハーバート・スペンサーの感情論」, 『桃山学院大学 社会学論集』, 印刷中

Shorter, Edward 2009, “Darwin’s contribution to psychiatry”, *The British Journal of Psychiatry*, **195**: 473-474

内井惣七 1995, 『科学哲学入門』 京都: 世界思想社

Alexander Bain's Theory of Emotion (2) : The Emotion and the Will, Third Edition

HONMA Eio

In this paper I clarify the influence of the evolutionary thought of Herbert Spencer and Charles Darwin on Alexander Bain's theory of emotion.

Bain learned evolutionary psychology from Spencer's *The Principles of Psychology* (second edition, 1870-1872) and took examples of the expression of emotions and their principles from Darwin's *The Expression of the Emotions in Man and Animals* (1872).

When Bain introduced evolutionary thought in earnest for the first time in his *The Emotion and the Will* (third edition, 1875), he believed that emotion could only be explained to a limited extent by organic evolution.

In particular, Bain thought that moral sentiments, which Spencer believed human beings had acquired in the course of evolution and which had since become innate, were acquired by personal experience rather than being inherited. On the other hand, he believed that sympathy and affection, which formed the basis of morality, were inherited.